復活節第３主日礼拝説教「朝の食事にご招待」予稿

日本基督教団石神井教会　2024年４月14日

【旧約聖書日課】イザヤ書　61章1～3節

1 主はわたしに油を注ぎ
主なる神の霊がわたしをとらえた。
わたしを遣わして
貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。
打ち砕かれた心を包み
捕らわれ人には自由を
つながれている人には解放を告知させるために。
2 主が恵みをお与えになる年
わたしたちの神が報復される日を告知して
嘆いている人々を慰め
3 シオンのゆえに嘆いている人々に
灰に代えて冠をかぶらせ
嘆きに代えて喜びの香油を
暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。
彼らは主が輝きを現すために植えられた
正義の樫の木と呼ばれる。

【使徒書日課】ペトロの手紙一　1章13～25節

13だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。14無知であったころの欲望に引きずられることなく、従順な子となり、15召し出してくださった聖なる方に倣って、あなたがた自身も生活のすべての面で聖なる者となりなさい。16「あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである」と書いてあるからです。17また、あなたがたは、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を、「父」と呼びかけているのですから、この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです。18知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、19きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。20キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました。21あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。22あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。23あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生きた言葉によって新たに生まれたのです。24こう言われているからです。
「人は皆、草のようで、
その華やかさはすべて、草の花のようだ。
草は枯れ、
花は散る。
25 しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」
これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　21章1～14節

1その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第
はこうである。2シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身の
ナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。3シモン・ペ
トロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言っ
た。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。4既に夜
が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分
からなかった。5イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、
「ありません」と答えた。6イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれ
ばとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げ
ることができなかった。7イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言っ
た。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込
んだ。8ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキス
ばかりしか離れていなかったのである。9さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあ
った。その上に魚がのせてあり、パンもあった。10イエスが、「今とった魚を何匹か持っ
て来なさい」と言われた。11シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百
五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなか
った。12イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、
「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたか
らである。13イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。
14イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

「主だ！」【こども説教のために】

イースターの日にご復活なさって弟子たちの前に現れてくださった主イエスは、何度も弟子たちの前に現れてくださいました。

弟子たちの中には、何人も漁師がいました。ティベリアス湖でのことです。弟子たちが、仲間ばかり七人で舟を出し、夜通し漁をしましたが、何も取れないことがありました。夜が明けるので陸に向かっていたところ、だれかが呼びかける声が聞こえました、「**何か食べるものがあるか**」。「何も**ありません**」と答えると、その人は、「**舟の右側に網を打ちなさい**」と言うのです。不思議に思いましたが、網を打ってみると、たくさんの魚が網にかかり、引き上げられないほどになったのです。それで、弟子の一人が気づいて言いました、「**主だ**」。陸地から呼びかけたのは主イエスだと気づいたのです。弟子のペトロは、すぐに湖に飛び込んで陸を目指しました。他の弟子たちも舟を陸に上げました。そこには、炭火を起こして魚を焼き、パンを用意してくれている人がいました。そして言うのです、「**さあ、来て、食事をしなさい**」。弟子たちは皆、それが主イエスだとわかりました。舟で湖を行くときも、漁をするときも、食事をするときも、いつも一緒にいてくださったお方なのです。

「**食べるものがあるか**」と心配してくださるお方。「**食事をしなさい**」と招いてくださるお方。そのお姿は、ご復活なさった主イエスなのです。

「わたしは漁に行く」

「イースター（復活祭）」から数えて三度目の日曜日ですが、今日も、「ハレルヤ」の讃美を歌って礼拝を始めました。ご復活を祝う教会の歩みは続いているのです。

とは言え、いつまでもお祭り気分でいるわけではありません。わたしたちの営みは、日常に戻らなければなりません。「イースター」の日には無理しても教会に足を運び、祝いの礼拝に加わろうとなさった方でも、「毎週というわけにはいかない」と、日曜日の朝に為さなければならないことを優先し、ここにはいらっしゃらないということもあるでしょう。礼拝堂に集まる者が少なくなるのは、わたしたちの生活が日常に戻り、平常運転になっているということでもあるのです。

それでも、わたしたちは、ご復活の主を忘れて過ごすわけではありません。「イースター」を祝ったわたしたちは、祭りが終わり、日常生活に戻っても、なおそこで、ご復活の主と共に歩むようにされています。

もちろん、祭りの日のようにはいかないかもしれません。そもそも、わたしたちの多くは、日曜日の教会に足を運び、共に礼拝に加えられる中で、かろうじてご復活の主とお会いしている、というのが、実際のところでしょう。四六時中、教会にいることを許され、いつでも礼拝堂で祈ることができる環境にいる牧師であっても、それは同じです。

けれども、「イースター」を祝ったわたしたちは、日々の営みに追われていても、なお、ご復活の主と共に歩むようにされているのです。いいえ、むしろそのような日常の中でこそ、ご復活の主とお会いするようにされているのかもしれません。

主イエスの弟子たちのうち、少なくとも四人は漁師でした。シモン・ペトロとその兄弟、ゼベダイの子たち、この四人です。彼らは、ガリラヤ湖＝ティベリアス湖に舟と網を持つ漁師でした。漁師としての生活こそが、彼らの日常でした。主イエスに従うようになる前は、漁師として生き、家族を養うことが生活のすべてだったのでしょう。そして、彼らは、主イエスの旅を共にし、主の十字架と葬りを経た後にも、漁師としての生活を捨てたわけではなかったのでしょう。「**わたしは漁に行く**」とシモン・ペトロが弟子の仲間たちに声をかけると、「**一緒に行こう**」という者が全部で七人になりました。ところが、その日は不漁でした。彼らの中には漁師でなかった者もいたでしょうから、連携がうまくいかなかったのかもしれません。仕方なく漁を終えようと陸に向かった彼らに、岸から呼びかける者がありました。それに応えているうちに、弟子の一人が突然言い出したのです、「**主だ**」と。「ご復活の主がそこにいらっしゃる」。なぜか、彼らはそうわかったのです。

「さあ、来て、食事をしなさい」

ある人たちは、このとき弟子たちがご復活の主に気づいたのは大漁の奇跡を見せられたからだ、と説明します。とは言え、彼らの半数以上は、もともと漁師です。漁師として数えきれないほど漁をし、不漁のときもあれば、大漁のときも経験してきたでしょう。経験がものを言う仕事だとしても、思ったように獲れないこともあれば、予想外に大きな漁獲を得たこともあったでしょう。わたしたちが日々、仕事をしたり日常生活を送るというのは、そういうことです。だからこそ、努力が実らずに打ちのめされて、「神よ、なぜですか」と問うこともあれば、大きな結果を得られて、「神よ、感謝します」と言うこともあるでしょう。けれども、自分にとって望ましい良い結果が得られたからと言って、そこにご復活の主がお働きくださっていると考えるわけでもないのではないでしょうか。

それでも、彼らはご復活の主に気づきました。岸から呼びかけた人。そこで彼らを待ち構えるように食事の準備をしていた人。その人がご復活の主だと、彼らは気づきました。

生前の主イエスを知っていた彼らにとって、それは当然のことだったのでしょうか。けれども、福音書は、そのときの様子をこう解説するのです、「**弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった**」。なぜ、このような説明がされるのでしょうか。それは、彼らがそこで見ていた人が、生前の主イエスそのお方だとはっきり言えるお姿ではなかったからではないでしょうか。もっとはっきり言えば、彼らが知っている主イエスのお姿ではなかったからではないでしょうか。

それでも、彼らは、「**あなたはどなたですか**」と問いただすことはしませんでした。その人は、「**何か食べるものがあるか**」と彼らの食事の心配をし、焼いた魚とパンで食事を整え、「**さあ、来て、朝の食事をしなさい**」と彼らを招いてくれたのです。それは、生前の主イエスが彼らのためにしてくださっていたことに他ならなかったのでしょう。それがご復活の主であると気づくために、ほかにどんな説明や証拠が必要でしょうか。

だからこそ、彼ら弟子たちの教会は、呼びかけたのです、「あなたは、何か食べるものがありますか」と。教会は、食事の場を設けたのです。そして、「さあ、来て、食事をしなさい」と招いたのです。いいえ、それはもはや、教会の働きに留まらないで、一人ひとりの日常の中でなされてきました。

そのような営みをしても、だれも、「あなたがたは何者で、そのようなことをするのか」とは問いたださないでしょう。それは、ご復活の主のなさることだからです。そこにご復活の主が現れられているからです。ご復活の主がいらっしゃるしるしは、わたしたちのただ中にあるのです。